

「縁・運・つき」と「創発進化」

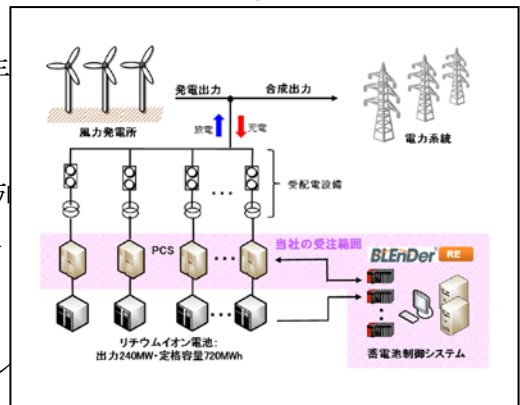
1. リチウム電池が切り開く世界

右掲は、今年のノーベル化学賞を受賞された吉野彰さんです。リチウム・イオン電池の基本を発見され事業化が実り、今日、いろんな分野で小型軽量の充電電池として広く利用されております。スマホやPCのバッテリーは、もちろんですが、近未来的な利用法として、日産では太陽光発電の10年固定価格買取制度(FIT)の恩恵が切れる啐FIT家庭に、発電したエネルギーをEV車のバッテリーに蓄積して家庭用電力として自家使用を呼び掛けています。これは、オール電化の普及でもあるので、IHクッキング・ヒーターやエコキュート等とセットとなって、エコに絡む応用分野が広いので期待度が高いものです。



因みに、現在のEV車のバッテリーは40~62Kwhと大容量なので、家庭の使用量(約3Kwh)をクリアしているので、太陽光発電が4Kwh程の能力があれば、外部からの電力供給がなくても連続して生活が可能になる計算になっています。このスキームは、エコ社会を実現する上で重要な課題になる物と思われ、大容量のリチウム・イオン電池と太陽光発電などの組合せが近未来の一つのパターンになる可能性があります。現実的には、EV車の普及という事で走行距離やバッテリー充電時間の問題が大きな課題ですが、完全なエコ住宅を希望される方にとっては魅力ある組合せであります。

右掲は、三菱電機のHPにあった北海道北部風力送電株式会社の北豊富変電所(北海道天塩郡豊富町、2022年度稼働開始予定)に建設される世界最大級※の蓄電池システム(出力240MW、定格容量720MWh)に導入される予定とあるイラストです。このイラストではリチウム電池を平列につなぐ構図ですが、この他、大容量蓄電池には、ナトリウムを電極に使う日本ガイシのNas式蓄電池もあります。いずれも、地球温暖化を防ぐには、自然エネルギーによる発電がキーになるので、今後、見逃せない重要なソリューションとして期待されます。



2. 意外な事から創発進化

吉野さんはTBS系番組のインタビューで、研究者として重要な事は、「柔らかい頭と真逆な執着心」と答えられています。吉野さんは旭化成の社員ですから、研究の先、GOAL(製品)を開発して実用化する事が本来的なミッションなのです。GOALまでの道のりは試行錯誤の繰り返しなので、一言に「繰り返し」と言いますが、チャレンジした時に「壁」が立ちただかるので、誰もが跳ね返されるのです。この壁にぶつかった際に、柔らかい頭で要因を分析して新しい可能性を見つけ出して実験するという繰り返しを行う「執着心」が伴うことが大切なのです。多くの偉人が「あきらめた時が失敗」とおっしゃっているのを思い起こします。

また、当初狙っていたGOALと違うGOALになったとの事です。私の推測ですが、「縁」としていろんな方との交流の中で、「運」よく大掃除で一つの論文に出会い、「つき」として実験に成功して特許になったという「縁・運・つき」の基本があったと思うのです。そして、それを可能にしたのが「柔軟性」と「好奇心」だったのではないかと思います。こうした結果、今回のノーベル化学賞受賞につながるリチウム電池の実用的発見に発展したと推測するのです。その過程には、いわゆる、偶然性も働いたので「創発進化」と言えると考えます。リチウム電池の開発に行き詰っておられた吉野さんが、大掃除の時に多くの資料を整理する中でリチウム電極を使用する論文を発見した運命的な偶然性です。それを信じて行動に移された吉野さんの実行力に感服します。

3. 「ピンチ」と「創発進化」

602号で「人(脈)」で始まる「創発進化」と題して記事を書いています。創発のキッカケの多くはピンチから起きているのです。「ピンチはチャンス」と言いますが、人は、元来「なまけもの」なので、うまく行っている時は「保守」的なのです。だから、景気が順調であれば、PDCAサイクルの管理でも十分に意義があるのですが、ピンチを打破するには、PDCAではなくOODA(状況対応)的に即対応する事が重要なのです。602号では、この即対応には経済的なゆとりが重要だと書いています。

実際、吉野さんのようなノーベル賞に輝く大きな成果を生んだのは旭化成という強力なバックボーンがあって可能になったのです。これは「力相応」という事がポイントではなかったかと思えます。研究のGOALを変えて行く訳ですが、その為には研究開発費が嵩む訳です。旭化成が可能な範囲でGOALを動かせたからリチウム・イオン電池に至ったとも考えられるのです。つまり、どんな会社でも「力相応」の「一番」を追究する事が重要な事なのです。弊社のような存在でも「Faxちらし・3段活用マーケティング」として企業なら100%普及しているFaxにターゲットをあて、コンテンツづくりで独自性を出して今日に至っています。

何事をするにも故船井先生の2つの教え「素直プラス発想勉強好き」と「時流適応力相応一番主義」がトップとして重要な素質になります。「素直」・・人の話を聞く姿勢、「プラス発想」・・人の話に対して積極的になれる性格、「勉強好き」・・コツコツと続ける事です。しかし、現実的には、「うちは・・・」と否定的になる方が多く、「やっぱりダメや・・・」とネガティブになりボヤク方、そして、「おいしくない」とすぐに諦める方が多いのです。これでは、「縁・運・つき」から見放されてしまいます。やはり、ポジティブ(素直プラス発想)な方が成功のチャンスが多いと思えます。

人生において、吉野さんのように明るく前向きに過ごす事が「縁・運・つき」を呼び込むのだと思います。企業経営も社員の活性化に「明るい」という事と常に「前向き」でチャレンジする事が欠かせないのです。「脱マンネリ」と言いますが失敗を恐れなくて「力相応」にチャレンジして、少々の事にはめげずにOODA(状況対応)的にGOALを変えてでも成し遂げるといふ粘りが重要だと実感しています。

4. 「素直プラス発想勉強好き」で「創発進化」

10月11日のタナベ経営のFCCマネジメントレターの「今週のひとこと」に「勝てる条件をつくらう。決めては何か。それを見抜き、実行しよう。」でしたが、ピンチになった際に狼狽えず、状況を冷静に見渡して「糸口」を見つける事が重要なのです。タナベ経営は「勝てる条件」としているが、自力で行える物でなければ、実行に移せないのです。そういう意味では、故船井先生の「時流適応力相応一番主義」で物事を見つめ、「素直プラス発想勉強好き」でコツコツと着手する事が大切だと言えるのです。

私は、ノーベル化学賞を受賞された吉野さんの研究は、大掃除の際に発見した米国のグッドイナフさんのリチウム電極の論文が目飛び込み即座に「イける」とピンと閃かれて実践に移されたのではないかと推測します。「素直」という要素には、こんな局面があると思えます。それを「イける」と直感して、現実に着手して試行錯誤を繰り返す「プラス発想」的な柔軟性であり、吉野さんの言葉にあった「逆説的な執着心」つまり「勉強好き」で無心になってチャレンジする突破力があって「リチウム電池」に「創発進化」したのだと故船井先生的に言えると思えます。

タナベ経営は理詰りな要素が多いのですが、故船井先生は「直観力」という閃きや「つき」という要素を大事にされていたという大きな相違があります。私は、所詮、人の世界ですから、笑福亭鶴瓶師匠の「縁・運・つき」という人間味が濃い表現の方が好きです。「縁」を大事にするには、物事を素直に受け入れる事から始まります。故船井先生の「素直プラス発想勉強好き」が重要な要素になると確信しています。これからも故船井先生の教えを大事にしたいと思えます。

【AMIニュースのバックログは <http://www.web-ami.com/siryo.html> にあります！】